

遍照心院へんせうしんゐん〔八条櫛司にあり〕六孫王源經基公を祀る。〔天徳五年薨逝し給ふ、即此所に靈廟を築て六孫王権現と崇奉

る〕其後鎌倉右大臣実朝公の後室三位禅尼〔法名本学坊、内府信清公の女〕大檀越と成、木幡廻心上人を請じ開山とし

て、戒律三論真言兼学の浄刹となる。鎌倉二位禅尼〔平政子〕伊予の国新居庄を寄られ、右府將軍の菩提場となし給ふ。

正堂には阿弥陀并に四天王像を安ず。〔運慶の作〕方丈には中央宝冠釈迦仏〔左、源実朝公、承久元年正月廿七日他界、

右、開山真空廻心和尚、文和五年十月八日入寂〕本願〔三品大夫人八条禅尼文永十一年九月九日遷す〕方丈の額〔夢窓

国師〕遍照心院の額〔光悦弟子宗真筆〕誕生水〔方丈の東にあり、上に弁財天を祭る〕当山年歳久しく大に荒廢の体今

昔物語に見へたり。こゝに宝永年中、坊中東林院南谷師將軍家へ願て今の如く嚴重に再興に及ぶ。其上例歳九月十一日

神事放生供養あり。〔南谷師は近代の能筆にて世のしる所なり、崎人伝に悉し〕方丈の林泉は廬山を移して諸樹を作り

木とし連山の体をあらはし、枝を撓て飛泉とし、白砂を布て流水とし、風景真妙なり。初めは夢窓国師の作なり。後世

に及んで伏見の朝霧島之助てふ者補作すとなん。京師庭造の一奇品なり。

遍照心院の靈宝数品あり、特に將軍家御寄附の武器多し。又音律の函竹あり。

函竹 五分一函

副 翰 云

年次十二律者恩徳院詮芸並樂人敦秋之兩人歷三十二箇年一応永十九年調畢故号之年次双調功黄鐘盤涉之三管者年次之

同作詮云所レ被ニ調置ニ之也兼又平調鐘之模者御花園御宇奏レ之於禁裏模金於木金木雖異音律相協故達ニ上聞ニ依レ有ニ叡  
感ニ是亦為ニ靈宝ニ自レ爾以來雖レ為ニ恩徳院ニ累代交割即今令レ寄附ニ長老坊ニ者也此皆雖レ非ニ法会之器ニ唱器唱明梵唄助  
音之具也以レ之末代正於衆僧之音云我願望茲滿而已

恩 徳 院

○恩徳院〔或京程図在八条室町東頭隆堂金色堂恩徳院等載三千一所云云。或云、今遍照心院塔頭有恩徳院至于後世  
而遷レ之乎〕

〔暁筆記云、洛陽西洞院恩徳院と申侍る寺は、花山院殿の御寺とかや、応仁の大乱の内花山院殿の室かくれ給ひしに、  
みだれの内の事なれば御死骸を忍びて恩徳院へうつされしなり〕

○（遍昭心院塔頭）実法院は林泉広くして、東北の風景を湛て雪の日の眺望あり、特に蓮池ありてみな月の花盛には香  
芬々として紅白色をあらそひ、其外爪紅本紅唐蓮などの名草多し。これを見んとて朝日の出るを待て群来る騷人歌よみ  
詩作りて、水芙蓉を賞ずる事わかん和漢に異ならず。越女が歌、妃子が歩、芳氣十里に聞え花の君子とも賞ず、蓮を愛する事  
予に同じき者は何人ぞやと茂叔はつぶやきける。

采 蓮 曲

采蓮溪上女。

祇向花多处。

花多人不見。

栲

亭

花底聞花語。

入<sup>テ</sup>花<sup>ニ</sup>花<sup>ニ</sup>入<sup>レ</sup>見<sup>。</sup>

出<sup>テ</sup>花<sup>ニ</sup>始<sup>テ</sup>見<sup>レ</sup>花<sup>ヲ</sup>。

乃知薄情子。

同

只是宿<sup>スルコトヲ</sup>他<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>。

蓮<sup>ハス</sup>の香や水をはなる、莖二寸

蕪

村

蓮にのる朝日涼しく神の国

籬

島

○（同塔頭）東林院〔門外の東にあり〕林泉広く東南をうけて月に雪に美観<sup>びくわん</sup>たらずといふ事なし、此院は書聖<sup>しよせい</sup>南谷師<sup>なんこくし</sup>の

住居にして、庭中の西に書斎あり。

南谷師の一行を見て

一行の鴈<sup>かり</sup>や端山<sup>はやま</sup>に月を印<sup>いん</sup>す

蕪

村